

巻頭言（2014年4月号）

理事長 新谷友良

「本当は聞こえているのでしょうか？」

佐村河内氏の問題で、社会が目立たないところでささやかれていた「本当は聞こえているのでしょうか？」という陰口が、社会の表面にヌッと出てきました。この言葉に傷つかない聴覚障害者はいないと思います。

「本当は聞こえているのでしょうか？」という言葉は、「嘘をつくことは悪いことだ」というごく当たり前の気持ちから口にする人が多いと思いますが、社会的に弱い立場にいる人へのサポート、支援への違和感から発言するような人もいると思います。テレビのワイドショーなどでは、漫才師の家族の生活保護受給報道と同じようなバッシングやヘイト・スピーチが目立ちます。

「聞こえの障害は見えないから周りの理解が得にくい」といわれます。佐村河内氏の聞こえの説明は釈然としませんが、私たちの聞こえの程度はまちまちです。全く聞こえない人から聞き洩らしはあっても日常生活の会話には困らない人まで様々です。素人考えですが、感覚系の障害の場合どのように生理的・病的検査を突き詰めたとしても、最後は「本人しか分からない」領域が残るような気がします。検査結果で「脳幹反応があるから聞こえているはずだ」といわれても、本人にとっては「聞こえてはいない」あるいは「音は分かるがなにを言っているのか分からない」という状態はあると思います。ただ、純音の聴力レベルが低いと聞こえが困難なことは間違いないことで、全難聴は今回の問題を契機とする障害認定の見直しを国際基準の純音聴力レベル 40 デシベル以下に沿うことを求めています。もしこの方向での検討が進めば、現在は障害者手帳の取得ができない中等度・軽度の聴覚障害者の手帳取得の可能性が大きく広がります。

一方障害認定の問題は別にして、「本当は聞こえているのでしょうか？」と聞かれたら、私たちはどのように答えるのでしょうか？ 聞こえの程度がまちまちであるとすれば、一人ひとりの答えは異なります。多かれ少なかれ感じている聞こえの困難さを、例えば「静かなところなら、あなたの話は聞きとれる」とか、「アナウンサーの声は聞きとれるけれど、トーク番組は早くて分からない」とか……面倒くさくて大変ですが聞こえの問題についての社会の正しい理解を求めるには、私たち自身の聞こえの困難さを丁寧に言葉にすることも欠かすことができないと思います。